文京区アカデミー推進計画策定協議会
第３回文化芸術分科会

日時：平成２２年７月７日
午後６：３０～８：３０
場所：文京シビックセンター１０階　１００１会議室

文京区アカデミー推進部アカデミー推進課

文京区アカデミー推進計画策定協議会第３回文化芸術分科会会議録

（敬称略）

「出席委員」

座　長	水越 伸
委　員	内野 篤
委　員	長尾 栄一
委　員	中川 澄子
委　員	楢崎 華祥
委　員	柳澤 愈
委　員	八木 茂

「事務局」

アカデミー推進部アカデミー推進課	八木 茂
アカデミー推進部アカデミー推進課	林　文昭
アカデミー推進部アカデミー推進課	佐藤 祐司
株式会社富士通総研	稲永 和年
株式会社富士通総研	瀬戸 香織

○水越座長：皆さん、お久しぶりでございます。第３回の文化芸術分科会を開催したいと思います。４月・５月とやってきましたので本来６月だったのを、ちょっとずれ込んで７月上旬にやってるということですが、今回のものを踏まえてまとめていくことになるかと思います。最初に事務局から今日の配付資料と、事前に郵送してもらったものもあるかと思うので、まとめて確認していただければと思います。

○事務局：まず出欠確認からさせていただきます。長尾委員、楢崎委員、笠井委員は所用により遅れますとの連絡を受けています。

文化芸術分科会ではありませんが、メンバーの交代がございましたので、ご報告させていただきます。生涯学習分科会の町会団体から推薦をいただいております村松様が渡辺泰男様に代わってございます。国際分科会の中学校 PTA 連合会からの団体推薦で、本松様から清水文雄様に変更がございました。出欠ならびに委員の交代につきましては以上でございます。

続きまして、配付資料の確認をさせていただきます。事前に郵送でお送りしました第３回文化芸術分科会の次第等の資料をお持ちでない方がいらっしゃれば、お申し出ください。続きまして本日の席上配付の資料が６点ございます。１点目が座席表、２点目がアカデミー推進計画策定協議会分科会委員名簿、３点目が文京区アカデミー推進計画調査報告書　追加集計資料、４点目が「文京区アカデミー推進計画」文化芸術分野　事業（案）提案シート、５点目が文京区アカデミー推進計画策定協議会分科会意見シート、最後が基本構想をとじたものがございます。こちらは６月 21 日の区議会で可決された最終のものとなっております。

引き続き資料の説明をさせていただきます。【資料文化－第５号】と【資料文化－第６号】とがございます。第１回・第２回で、委員の皆さまに付箋に書いて集計などしていただいた内容を整理してまとめたものでございます。また、参考資料としましてＡ３版で縦長の資料がついているかと思います。こちらは皆さんに付箋ではっていただいたものを写真で写したもので、白黒でちょっと見にくいかもしれませんが、そのまま直接印刷したものでございます。次に【資料文化－第７号】、こちらは皆さまからいただきました意見に基づきまして、体系づくりに向けて項目案としたものでございます。また、文京区アカデミー推進計画調査報告書のライフスタイル分析について、タイプごとに名前をつけまして考え方をまとめた資料を作成しました。計画の策定ならびに今後の作業進行のための基礎資料としてお使いください。

資料等の説明は以上でございます。

○水越座長：ありがとうございます。基本構想が基本的に可決をされたわけですね。それで今日、我々がやるべきことはですね、今日の文化芸術分科会次第というところで、一番最後にも林さんがおっしゃってくださいました資料の第７号、表のようなものになっておりますけども。これは、これまで僕たちが２回、ワークショップ形式で付箋を貼り付けたりしながら議論をしたようなことを、いわばそのままここに持ってきて、それの上位の区分といいますか分野みたいなものを、仮にですね、区の皆さんと富士通総研の皆さんと私のほうで、あらかじめ少し検討したひな型でございます。これを、文言とか、こういうカテゴリーでいいのかとか、そういうことを、過去にやったことを踏まえながら今日は固めていくと。そういう作業になります。そのために基礎資料とかスタイル分析のほうなんかを、バランスがとれるようにということで用意をしてもらったというふうに思います。

脇の話なんですけど、気になるというこの、追加集計とかライフスタイルというのは、僕もちゃんと見てないんですけど、どういう目立ったことが。何か文京区に特有のこととか、そういうことはあったんでしょうか。

○八木委員：ライフスタイル分析のことですが、アンケート調査での項目を、昨年度までの協議会の中では、具体的な名前がつけらないということで、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅということにさせていただいたという経緯があります。その後、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅだと全く想像がつかないので、なんとかネーミングはないものかというお話を頂戴しておりました。それで富士通総研さんと私どものほうで話をして、とりあえず分析ができるんじゃないかなということでネーミングをさせていただいたものであります。資料の中身そのものは従来と変わったものではなく、ネーミングがついた点だけ違っています。それぞれの集計表でもネーミングを変えています。本日は、この

芸術分野に関係するものだけピックアップをして名前を付した形の資料になってます。よろしくお願いします。それから集計のプロセスについては、事務局の佐藤からいたします。

○事務局：こちらについても今、参考資料という形で緑の冊子で作りましたもの以外で、文化芸術ですとか生涯学習、スポーツ、それぞれ質問のほうをさせていただいてるんですけれど、すべて参加をしてると答えた方と、すべて参加をしてないと答えた方がどういうカテゴリーにいて、どういうことを希望されているのかというのを追加で集計をとらせていただいたものということで、こちらを作ってございますので、参考にしていただいて。参加を増やしていくということですと、何も参加してない方を、どうやって参加をしていくのかというようなことも必要になってくるかと思いますので、そういう方たちがどういうものを、どういう講座を希望してるのかとか、どういうことをやりたいというか、思っているのかというところを見ていただくと、計画をつくる上での参考になるのかなというふうに思いまして、追加で作らせていただいたものになります。

○水越座長：この追加集計、もう少し、ここを見てくれというとこがあったら。ちょっと分量が多くて、単純集計なので。

○事務局：そうですね、小さくなって申し訳ないんですが、まず１ページ目のところですね。性別、年齢別、職業別、結婚されてるのかどうかというところが、１としてはすべて取り組んでない人、２としてはすべて取り組んでいる人の割合という形で入ってますので、こちらのほうでどういう。いずれも取り組んでないというふうに選んだ方が 111 名いらっしゃった。すべてに取り組んでいるというふうに答えた人が 139 名いらっしゃったという形になって、

○柳澤委員：この間に、いずれか１つ参加しているという人たちがいるわけですか。

○事務局：そうですね。

○柳澤委員：それは、はずしてあるわけですね。

○水越座長：間を抜いてるんですね。

○事務局：はい、そういった方は抜かせていただいて、じゃあ、すべて参加をされてないという方たち、今後どういうことを希望してるのかというところを見ていただくと、４ページのところですね。問３のところで「あなたが今後参加または鑑賞したいと思う分野・テーマはどんなことですか」ということで、いずれも参加してない方と、すべて参加してる方に若干違いが出てきているというところですかね。

次の５ページのところなんですけど、「参加しやすい時間帯はいつですか」という質問のところでも、すべて取り組んでいる人と取り組んでない人で、すべて取り組んでいる人については、平日の９時～18 時が 49.6%という形の高い比率にはなってるんですが、どれも取り組んでないという方は 18.9%と、それほど高くないという傾向が出ていると。希望されているので一番高いものは、やはり土日祝日の９時～18 時を希望されているというところですと、事業を行うときに、そういう時間帯を選んでいくというようなことですとかですね。若干、取り組んでいる方と取り組んでない方の違いというのが出てきているのかな、というところを、今後、事業とかを考える際にですね、参考にしていいただければというふうに思いまして、追加で集計をさせていただいたというものになります。

○水越座長：これを見ると、結局、全然取り組んでない人というのは、やっぱり土日祝日じゃないと動けないということですよね、極端な言い方をすればですけど。

○事務局：はい。

○水越座長：いろいろ取り組んでいらっしゃる方は、これを見ると、平日も休日もいいよと。でもどちらかというと、これはどちらも大丈夫ですね、平日も大丈夫だということをおっしゃって

いるということで。これは常識的に考えたらそうですよね。休みの時にやってくれということですね。

○柳澤委員：私の個人的な経験でもそうですね。現役の時には、月曜日から金曜日まではとても無理ですね。

○水越座長：全部参加してるという人の、女性が男性の倍いるわけですね。全部参加してないという人も、若干女性が男性より多いっていう、面白いですね。そんなにむちゃくちゃ、20 代～70 代まで、１ページ目の２つ目の表ですけれども、年齢がものすごく偏りがあるわけではないですね。すべてに参加してる人で、20 代の人とか 30 代の人も結構いらっしゃる。もちろん 70 代以上の方が多いですけど、全然参加してない人も年の取られた方も多いということ。だから思っているほど、そう年齢差はない。

○中川委員：興味ある別に見ますと、ここの統計の中で見ますと、音楽、美術、舞台芸術、13 ページあたりなんですが。こういうところはある程度参考になるんじゃないでしょうか。

○柳澤委員：ただ、先生、実は伝統芸能が、全部参加してる人には意外と人気があるんですね。どこかに出てたんです。４ページの一番最後のところ。おっしゃるとおりで、音楽が１番ですよね。音楽が１番、美術が２番、舞台が３番みたいな感じになってますね。で、全部に取り組んでる人が意外とだから多くて、全然取り組んでない人と著しく差があるのは５番の伝統芸能とか舞台芸術とかですね。大きいですね。だから問題は、これは鑑賞ということになってるので、自分でやるかどうかっていうのは、ちょっとまた違うというところはあるかもしれないですけど、これはおっしゃるとおり、ひとつの大きなポイントにはなりますね。これはだいたい事務局の方々が思ったとおりって感じですか。意外だったようなことって何かありますか。

○事務局：今おっしゃられたところは確かに差があるんですけど、そんなに大きな差が出てるとはいえないんじゃないかなあというような気もします。

○柳澤委員：全然取り組んでない人で舞台芸術とか伝統芸能というのが少ないのは、これは大変でしょう。音楽会行ったり美術鑑賞は楽ですけど、これ、やるとしたら、かなり時間とエネルギーがいるから。

○水越座長：でしょうね。要するに、あまり行ったことがない人は、まず音楽行くとか、美術展なんかへ行くとかっていうところからということなんでしょうかね。

○柳澤委員：こういうとこで好きな人は入ってますからね。

○事務局：ですから、例えば身近なところから始められたら、きっかけになって先に進む人は進むかもしれませんし、進まないかもしれないという。

○水越座長：もう１つのライフスタイルのほうも、これはネーミングが大変だったと思うんですけど、これも難しい。これは全部が同じぐらいのパーセンテージというのはすごいですね。

○八木委員：たまたまなんですよね、パーセンテージが 20 ずつというのは。

○水越座長：これ、でも、さっき中川先生がおっしゃられたような感じの傾向は出ていて、仕事が忙しいと、基本的には、今後やりたいのは音楽とか美術等とかなんだと。で、活動しやすいのはいつかっていうと、こうだっていうことが出てますね。これはでもあれだな、活動を行いやすいあれっていうのが、土日平日を問わず日中ですね。平日でも…まあそうか、全部合わせてだからな…。

○柳澤委員：ライフスタイルのほうの 19 ページの関心ある分野で、音楽とか美術が高くて舞台芸

術や伝統芸能は低いから、そのまま素直に受け取ってたんですけど、今考えてみると、こちらのほうはかなり趣味が深くて、音楽とか美術の場合は適当に見に行って、何にもせんでも見に行けますわね。ところがやっぱり舞台芸術というと、時間と、ちゃんと何を見たいか目指して、お金払ってと。伝統芸能もそうですよね。だからこちらのほうは、もっと趣味としてかなり深く入ってる人たちっていう意味ですかね。だから深化の度合いが違うかもしれませんね、パーセント以外に。

○水越座長：その後のほう、ページが飛んでますけど、93ページで、区民と協力、これはぜひ進めてほしいというのが圧倒的。進めてほしいを合わせると圧倒的で、それで、97ページに、どういうことに注力してほしいかっていうのは、１人で気軽に参加できること。やっぱり１人で気軽に参加できないと、あんまり行かないんですよね。

○柳澤委員：そうですね、違うから。

○水越座長：これをどう解釈するかによりますけど、やっぱりこういうニーズがあるので、この人気の順番でやってけばいいという考えもあるんですけど、文化芸術というのがやっぱり人気とは別にいろいろな領域があるとすると、なかなかとっつきにくい。そういうものになるべくとっついてもらうための、もろもろの工夫をする、介在させるということが重要だっていうことも言えるんじゃないかと思いますね。気軽になるべくできるといいと思ってらっしゃる人が多いと。そうですね。

ありがとうございました。ちょっと脇にそれましたけど、せっかく用意していただいたデータなので、ちょっと目を通してみました。何かまたお気づきのことがあれば、委員の方以外、事務局の皆さんからもコメントしていただければと思います。

○水越座長：第７号に戻ってよろしいでしょうか。僕たちは、ここに今、ある程度作りかけた試案みたいなものをきちっとしたものに作り直す。最終的にはこのＡ３かと思いますが、これが１枚できるということが目標になります。間違ってたら補足を事務局の皆さんなどしていただきたいんですけども。これは、要するに３層構造になっているわけですよね。一番右側に吹き出しみたいなふうになってるところっていうのは、「関連する委員の意見」というか、個別にこういう活動があるよねとか、あるいはこういうことが重要だよねっていうようなことを我々が付箋で貼っていったようなことが、ここに出ています。そういうものを、１つ上位の区分でもって区分けしてみると、例えばこういうことなんじゃないかっていうのが、真ん中のところの「基本的な方向」っていうやつで、それを束ねたところが「分野別の目標」というふうになっていると。そういう抽象度の違いがあるわけですね。

僕のほうでは、なるべく抽象度の低いほうをきちっと考えた上で、抽象度の高いほうをやりたいと思ったので、２回にわたってワークショップ形式をやらせていただいたんですけれども、基本は「分野別の目標」が基本的な方向。で、より具体的な活動案なり活動のありようみたいなものが、多分この「委員の意見」というものに相当するところにくるということになると思います。それでよろしいんですね。

ちょっとじーっと睨んでていただけますか。その次のページに写真が載ってますが、これは我々がやったものですけど、こういうもののどれが入ってて、どれが入ってないか。このページの前のところに、４月と５月に出た項目がここに出ておりますね。こういうものを見ながらですね。こういう文章というのは、ある意味ではもっともらしい文言が並んでいるので、スルスルスルっといくんですけれども、こういう項目なり、こういうくくり方でいいのかっていうことですね。

○柳澤委員：この、しかし、体系づくりの項目案というのは、かなりよくできてますね。

○水越座長：そういうふうに言っていただけました。

○八木委員：皆さんのご意見が良かったので。

○柳澤委員：いやいや、意見…うまい具合に整理されてますよね。

○水越座長：これは比較的早い段階で、僕のほうから、まだこういうことに親しんだことがない人たちになるべく来てもらえるようなことが重要なんじゃないか、ということ。それから、何がどこでやられているかということが、ある程度わかったほうがいいというようなことをですね、ある程度ドライブをかけるといいますか、補助線として申し上げた。そういうことが「分野の目標」の例えば１番とか２番といったようなあたりに、ある意味で入っているかと思います。

○柳澤委員：だけど、このアンケートやなんかを見ますと、「参加したことがある」とかいろいろ見ると、結構文京区、これ、高いんですよね、もう。

○水越座長：参加率やなんかですか。

○柳澤委員：基礎調査表の円グラフだと 17 ページね。参加したことも鑑賞したこともあるというのが 25％で、鑑賞だけしたことはあると、参加したことはないが鑑賞したことはあるを入れますと、

○水越座長：７割近いですね。

○柳澤委員：だから参加したことも鑑賞したこともないというのが 33％で、三分の２、67％ぐらいは、ここまではみんな来てるんですね。

○水越座長：これは大したもんですね。

○柳澤委員：だから、それをもうちょっと８割近くに上げるということですかね。それとも、この、もっと参加、質を上げていくということですかね。中の質を。質を上げるという言い方は、ちょっと失礼な言い方なんだけども。

○八木委員：この数も、実はアンケートのとり方があるんですけども、１年の間に何回運んだかとは聞いていなくて、１回でも行けば、ということでアンケートをとっています。質や頻度までは聞いていない。

○柳澤委員：質のほうは出てないわけですね。

○八木委員：ええ。実は毎月のように行って 12 回という人もいらっしゃれば、１年でそういえば１回聴いたな、見たなという方も入るので、その辺は本当に難しい概念なんですけれども。

○柳澤委員：参加したことも鑑賞したこともないっていうのは事実と見て、この 33％はかなり正しい。これは全然行ったことないんですね。

○八木委員：そうですね。それをさっきのほかの分野との兼ね合いでどうかということも見てみたんですね。芸術文化には、参加しないけれども、実はスポーツをやっている、といのであればよいのでしょうけれども、何も一切、参加してないということに対しては、行政として何ができるかが課題になると思いますね。

○水越座長：でも、今、柳澤さんがおっしゃったとおり、確実に３割以外の人は何かを１年間のあいだにやったということですよね。それを僕はやっぱりどうなのかと。かなり大したことだと思います。おっしゃるように、何回やったかはわかりませんけど、基本的には結構率は高いと思うし。ここ、面白いのは、参加したことはある…さっき見たら、鑑賞の人が多かったんだけど、これは参加の人が多いわけですよね。

○柳澤委員：だから、これも鑑賞が多いんですよね。

○水越座長：そうか、わかりました、間違えてました。

○八木委員：論理的に読むと、参加をした人は 27.3%あって、鑑賞したことがある人は 62.3%ということで、足し算するとなりますね。

○水越座長：そういう意味でいうと、参加も鑑賞もしたことがない人をなるべく減らしてくということと同時に、鑑賞はしたことがあるけど参加したことがないという人も、

○柳澤委員：参加のほうへね、

○水越座長：参加に反映してくということですよね。逆にいえば、鑑賞だけやったことがある人が多いわけですよね。

○柳澤委員：そうですね。

○水越座長：で、参加も鑑賞もしたことがある人は、だいたい 25%ぐらいということですよね。ですから参加ということでいえば、要するに、自分で表現をしたり何かを作ったりということをやったことがある人は２割５分ぐらいなので、それを増やすっていう話と、何もやったことがない人に参加を促すっていう話、両方があるということですよね。

○柳澤委員：そうですね。この中をよく見ると、質的に上げるということは、25%のところを３割と４割と上げていくと。

○水越座長：恐らくさしあたりはそういうことかと思いますけどね。

○柳澤委員：絵でもそうですよね。美術、鑑賞に行くけども、実際に描くという人だと少ないですよね。

○水越座長：ただ、前に楢崎先生や中川先生がおっしゃったように、個別の会では結構人気があって、

○中川委員：鑑賞するほうですね。

○水越座長：そうですか、そうするとやっぱり話は合ってるというか。

○柳澤委員：私もいろいろ義理で鑑賞はするんだけども、やっぱり自分でやってないとわかりませんわね、実際は。本当の鑑賞は。鑑賞力がつかないと思うんですよね。

○中川委員：でも、見るのは好きとか、聞くのが好きという方もいらっしゃるんじゃないですか、音楽とか。

○柳澤委員：音楽はね、そうですね。

○水越座長：あとお芝居もそうですよね、伝統的な。

○柳澤委員：お芝居なんかもそうですな。お芝居とか音楽は割合、やらなくても。

○八木委員：見方も自由なんですけど、ただ、見方とか聴き方を教えてもらうと、さらに楽しめるかもしれないなと思えるのもあります。謡曲のような古典芸能だと、まず話が何を言ってるかが、普通には分からないだろうと思います。それをもし、講座か何かで勉強してから行くことになると、親しみやすさも出てきます。

○水越座長：歌舞伎なんかが好きな人たちってそうですよね。仮名手本忠臣蔵でだいたい暗記しててなんとかとか、「今日の扇雀はよかったわ」みたいな話で泣いちゃったりして、半分、自分がなんかできてるような感じですよね。で、あと、掛け声をかけたりなんかして。

○柳澤委員：好きな人はそうですね。

○水越座長：だから、ちょっとやや強引ですけど、おおむねこの追加集計とかライフスタイルで言われてることは、僕らが今言ってきたことと矛盾はしてないだろうと思いますね。その上で、すいません、戻りますが。この７号のＡ３を見ていただいたときに、いかがかということですね。恐らく見方としては、これまで２回とは逆に、一番抽象度の高い「分野別の目標」というところから見ていったほうが、多分わかりやすいはずだと思うんですよ。それに真ん中のところや一番右のところが矛盾なくつながってるかっていうことをチェックしたほうが多分いいはずで。

「分野別の目標」が５つ、今、想定されていて「誰もが文化芸術に親しむことのできる機会を充実させよう」ということ、「情報提供、相談体制の整備・充実」ということで、この２つは、新しい人に来てもらおう、きっかけづくりをしよう、うんぬんということが目標になっています。そういう実際の講座等々での機会を充実させるということと、そのための情報や相談のあり方というのは、ちょっと区分がされることなので分かれてるけど、この２つはひとくくりのことだと思います。

それから、文京区の文化とか歴史、つまり文化芸術なんかを持続的に、そういうものに魅力を持ってもらったりするための仕組みづくりですね。これは皆さんもご関係されてることが多いかと思いますが、真ん中の項目にあるようなことがここではポイントになっています。

４つ目は、文京区っていう区役所だけじゃなくて、区に住んでる人とか地域の、前に話が出てましたが、企業とか大学とか、いろんな神社仏閣とか、そういう場所との連携・協働。区役所というところと地域との連携・協働についてのことです。

５番目は、これはどちらかというと、計画全体の中での意味があるかと思って。特に文化芸術だけじゃないんですけれども、ばらばらでやるんじゃなくて、連携しながら推進していきましょうということですよね。だから、ちょっとここだけ意味が変わるんで、太い線が引いてあるという。こういうことですよね。

○八木委員：はい。５番の項目だけは、ほかの分科会でも同じことなので、この分科会では、この５番を落としますけども、別のところに共通項としてまとめて書いても同じことですね、ということです。ただ、必ず計画がどうなってるかというのは見ていかなくていけません。ということで、忘れないために書いてあることなので、実際の出来上がりは４つというようなイメージで、5番のみ共通項として外にくくり出すということです。

○水越座長：今、だらだらと僕が申し上げたのが全体の一番抽象度の高い目標で、今のお話によれば４項目になっていると。それはゆるく３つにくくることができるということになっていて、その下に、それぞれ３～４個ずつぶら下がる方向性というのがあるわけですね。いちいち読みませんけれども。

○柳澤委員：１と２とか４の場合には割合、やさしいっていうのもおかしいですけども、非常に具体的でありますが、この３は割に難しいですね。人づくり。３のこういう。これは大事なことなんですけども。これがあってみんなほかが始まるんですけども。

○八木委員：１番で親しむためには、実は３番で継続してもらってないといけないっていうことがありますね。

○柳澤委員：そうですね。

○八木委員：ですから若手にも、後継者にも育ってほしいですが、それは皆さんで考えるのか、区はどこまでできるのかということもあるんですけども、全体としては考えていかないといけな

いと思います。「古典芸能の後継者がなくなってしまいました」ということになっては、大変困ることですから。

○水越座長：これは前、議論したんですけど、ちょっと忘れてるので同じことを言うかもしれませんけども。３の（１）（２）（３）が、（１）は、今もう既にやってる人や団体を支援しましょうということですよね。で、（２）の人づくりの推進というのは、この人づくりというのは、ひとつは文化芸術的な活動をやっている人たちを育成するっていう、そういう意味ですよね。あるいは、そういうことを人に伝承したり、お披露目をしたり、みんなに伝えていくような人材。人材活用の推進と人づくりの推進ってどう…。人材がいて、それを活用するんですね。そうすると、活動する人や団体を支援する。支援した上でそういう人たちを活用して推進するっていうこと？　それで、この人づくりっていうのは……そうか、【鑑賞力育成・向上】と、こっち側の吹き出しに出てるようなもの…。どっちかというと伝達者ということじゃなくて、そういうものが面白く思えたり、親しめる素養がある人を育てるっていう意味ですね。

○柳澤委員：だから人づくり、養成講座とかそういうことで、そういう人をつくる、（２）は。（３）はつくっても、みんな活用しないんですよ、活動の場がないから。私はこれとこれを勉強しましたっていっても、なかなか勉強しただけで、それは地域還元できないんですね。その人づくりした人を、（２）でつくった人をここで活用するっていう意味ですかね。そうすると非常に単純なあれになるんですけどね、人材活用というのは。

○水越座長：恐らくこの（２）が、活用するぐらいの人もいるんだろうけど、その分野が面白がれるすそ野を広げるっていう意味も両方あるのかな。というか、僕らがここで考えればいいと思うんですけど、ちょっとすいません、この前、話し合ったかもしれません。この３の（１）（２）（３）の言葉が平明なので、かえって区別がしにくいかもしれないですね。

○柳澤委員：そうですね。ここのところをもっと議論したらいいかもしれませんね、ひとつは。

○事務局：人づくりの推進というところでは、先生がさっきおっしゃったような、後継者であるとかというのを想定はしてはいたんですけども、事務局のほうのお打ち合わせの時に、先生がさっきおっしゃった、すそ野を広げていくというところで、例えば展覧会に行ってみたら楽しそうだった。今度は自分でやってみたいと思って、例えば絵画を教わりに行こうと思って教室に入ってみた。それで、もっと楽しく、だんだんはまっていって、今度は自分で作品を描いて展示するまでにだんだん上達していった。そういう、らせん状に上達していけるような、そういうような形ですそ野を広げていく、というところでできるといいかというか、お話を先生からもいただいたもので。ここでちょっと言葉は迷ったんですけども、親しむ人々を増やす人づくり、というところでいえるのかなと思いまして、今この言葉にしております。

人材活用で思っていましたのは、もちろん（２）番で育ててきた人を活用するというのも、もちろんひとつにはあるんですけども、今現在、地域の中にいる方々、「自分はこんな経験があるんだよ」っていう方でも、出ていらっしゃらない方々がたくさんいらっしゃると思うんですね。そういう方々に今度は教える立場になっていただいたり、また「ふるさと歴史館友の会」というのがあるかと思います。そういう方々が町に出て、ボランティアとしてツアーを確かされているようなイベントもあったかと思いますので、もう既存のそういうグループである方々を今度は活用していけるといいのではないかというところで、ここの（３）番を挙げております。

確かに言葉の吟味というのはすごく必要なところですので、裏にはそういうような意図があったというところで、またご意見をいただければと思います。

○水越座長：すいません、自分でお話ししといてわからなくなってるんですけど。おおむね中身的にはいいと思うんですけど、僕らはこれにかかわってる人間ですけど、わかんない人にもわかるようにしといたほうがいいと思うので、比較的わかりやすくしといたほうがいいですよね。

○事務局：文化芸術というのは、結局、世代から世代を越えて、次の世代へ伝えていくという役

割が大きいと思いますので、確かにおっしゃるとおり、「人づくりの推進」だと、何についての人づくりかわからないかもしれませんから、少し言葉は吟味したいなと思います。

○水越座長：この３つは、今、瀬戸さんがおっしゃってくれたので非常にはっきりしてて、１つ目は、そういうことをやってる人たちを支援する。２つ目は、いわばすそ野を広げて、そういう人たちが鑑賞も参加もしてくれるようにしていくようにする、そういう仕組みを推進する。３つ目は、地域で既にやってる人たちに、教えてもらったり、あるいは展示をしてもらったりって、そういう人材をもっと発掘をして、活用っていったらあれなんですけども、活用してくということなので、重なりながら３つ違うことなので、必要は必要です。ちょっと言葉を考えたほうがいいと思うんですよね。今ちらっと「伝道」という話が出ましたけど、やっぱり「伝道」とか「伝承」とか。

○柳澤委員：今、私がやってるインタープリターというのがありましてね、それは文京区に生まれた文化財を区民の目線で区民に伝えていく、伝道するということを勉強して、一生懸命、４年ぐらいみんなで。何人ぐらい…60 人ぐらいいるんですけど、一生懸命やってるのは 30 人ぐらいですかね、勉強してやってるんですよね。その人たちは、勉強した結果、地域還元していかなきゃいかんということで、人材活用というところにつながってくるわけですね、それは。こちらのほうも一生懸命やってるんですが。だからインタープリターだけじゃなくて、いわゆる大きくいくと文化ボランティア、それから福祉のボランティア、それから地震の時にかけつける防災ボランティアと、いろいろボランティアあるんですが、こういう分野は文化ボランティアになるんですね。その中に生涯学習も入るし、それから、そういう文化財も入るし、あるいは芸術とか、ほかのボランティアもあるかもしれませんけどね、いくつか。そういう文化ボランティアを養成していくということになるんですかね、いろんな分野で。

○水越座長：それはこの３の（３）にはまるところですよね。

○柳澤委員：文化ボランティアはね。だから活動する人・団体を支援して、そういうとこに美術とか書道でも、実際、自分でやる人をどんどん…参加して、そういうことを進める…。難しいですな。自分がやらなくて、そういうことを進めるというのがおかしいんだけども、進める、そういう…なんて言っていいか。文京区の文化力、文化度とか芸術度を引き上げるための、そういう。これは推進体制のほうにも入ってくるんですけど、そういう人たちを育成するとかいうことだと、なかなか難しいんですけども。実際、そういうことに携わる人が増えてくれるのが一番いいんですけどね。参加する、活動する人・団体を支援した結果、そこで音楽なり美術なり、実際やる人の数が増えてくるのがいいんですけども、それをどうやって増やすか。

○水越座長：今おっしゃっていた３の（３）を、例えばですけど「伝道者の発掘と活用の推進」というふうにすると少しわかりやすくなるんじゃないですかね。「伝道者」という言い方がいいかどうかはあれなんですけど。まず、一般的に知られていない、埋もれた人材がいるわけで、発掘をして、その人たちに参加してもらうっていう必要があるわけですよね。文化芸術ボランティアみたいな話を、この真ん中の右側のところに項目として、今、柳澤さんがおっしゃったようなことを入れておくということにしてはどうかと思いますけれど。

○柳澤委員：文化ボランティアをね、一般論でね。発掘する人材はみんなそうですからね、広い意味では。

○水越座長：３の（１）はこのままでもいいかなと思ってて、（３）を例えば今言ったようなことで直して、（２）も直したほうがいいと思いますね、「人づくり」っていうのを。

○柳澤委員：「人づくり」のところは、実際のいろんなことをやる養成。書道なら書道、美術なら美術を、初歩の講座とか鑑賞講座とか、そういうこととまた違うんですかね。そういう養成講座をどんどんやると。

○水越座長：そういうことだと思います。そういう養成講座みたいなのが、多分一番右側に具体的に来て、真ん中のところに、それをもう少し抽象的にっていう感じだと思うんですね。

○柳澤委員：そうですね。で、その養成講座をつくる場合には、養成講座をつくる、講座を組み立てる力がなきゃいけませんから、それは何も書道ができない人でも養成講座はつくれますからね、先生と相談して。それは生涯学習のほうに絡んでくるんですけどね、そうなりますとね。そういう各分野で養成講座なり。養成というのは実際、実技と鑑賞がありますけど、実技と鑑賞を含めた、そういう養成講座を次々と開設すると。そうすると、開設するための人が要りますわね。先生だけじゃできませんから。そういうカリキュラムを先生と相談してつくって、募集して、集めて、教室も確保してっていうような、いろんなことが要るんですよね。そういうのが文化ボランティアなんですけどね。

○水越座長：場所を提供して、広報してうんぬんかんぬんというあたりは、多分、大項目でいうと２とか４とかに関係してきますね。

○柳澤委員：関係してきますわね、それは。

○八木委員：少しはやっていますけど、そういうことは大切なことだっていうことで、再度大きく書くということですね。

○柳澤委員：やってるけども、生涯学習のほうでも文京アカデミーでもやってますけども、このシビックのあの場所でやってるんですね。だからもう満杯なんですね。だから大学とかほかのところの場所を開放してもらって、そういう人材を活用したら、もっとできるわけですけどね。難しくなりますけども。場所はこの大学とかいろいろ、いろんな所を利用すれば、図書館とか、いろいろ美術館でも、みんな会議室みたいのを持ってますからね、そういうところを使えば、もっと。

○事務局：ちょっとよろしいですか。「人づくりの推進」と書いてあって、この「人」っていうのはどういう認識かって、皆さんでしたほうがいいのかもしれませんね、これ。

○水越座長：ただ、さっきからの話でいうと、この「人」は伝道者とかではなくて、文化芸術に関心を持って、区なり、区にあるいろんなことを活用しようとする、いわゆる区民ですよね。文化芸術に関心を持ってくれるような一般の人々のことだと思うんですね。

○事務局：事務局で発言してあれかもしれませんが、水越先生がおっしゃるように、すそ野を広げる。今まで無関心だった人を、どの分野であっても関心を持って楽しもうとする、楽しめるようになる人っていうのをつくろうというのが、その「人づくり」なんだろうということなのだろうと私は思うので。表現の、言葉のあやみたいなことになっちゃいますけど、かぎかっこでもつけてですね、「『楽しむ人』づくりの推進」とか「『楽しめる人』づくりの推進」とかいうような言い方になるのかなぁなんて思ったりしたんですが。

○柳澤委員：その楽しめる人たちが目的なんですけど、そのために「やる」人も要るんですよ。

○水越座長：それが多分、３の（１）でそういう人たちを支援をし、なおかつ発掘して、ちゃんと活用してくっていう（３）番の話があって。だから並びとして、真ん中にこれがないほうがいいですね。やるとしたらまず（１）があって、今の（３）が（２）のところに来て、（２）は（３）のところに来たほうがいいのかもしれないですね。

○事務局：これが順番というものでもないのかもしれませんけど、「楽しむ人」をつくって、楽しんでる団体を支援して、で、なおかつ、

○中川委員：初心者をつくるっていうことなのかな。

○水越座長：そうですね。

○柳澤委員：で、初心者をつくるときに、先生だけじゃなかなか忙しくて手間があれだから、

○水越座長：林さんが今、言った順番のほうがいいね。

○柳澤委員：そういう先生と、場所がここにありますよ、カリキュラムはこうですよ、人をこう集めましょうっていう、別の人も。そういうことに能力がある人もいないと、できないんですよね、先生だけではね。

○水越座長：今の話でいうと、さっきのデータを踏まえていうと２つあって、１つは、参加・鑑賞してくれるすそ野を広げるっていうことと、参加・鑑賞を継続的にやってくれる人を広げるというか。要するに初心者にたくさんいてもらう、すそ野を広げるっていうことと、それからリピートしてもらうというか、継続的にかかわってもらうっていうことは、非常に関連するけど、場合によると別項目でもいいかもしれない。つまり初心者を増やすことと、鑑賞と参加っていうのをらせん状にしながら、伝統芸能でも絵画でも継続的に興味を持ってもらうっていうのは、やや別のことで、さらにその先に伝道者みたいな人がいるっていう。

○柳澤委員：分野によっては鑑賞だけしかできないのもありますからね。とても伝統芸能やなんかは。落語なんてやろうったって、なかなかできないですけども。

○内野委員：今、３番の一番左側に書いてある二重丸。これを考えると、区民の中で循環っていうんですかね。というイメージで書かれてるのかなと思うんですけど。

○水越座長：そうですね。

○内野委員：そうですよね。区民の中でどんどんつくって、またその人が伝道者になったり、そういう循環でどんどん発展していきましょうというイメージかなとは思うんですけどね。

○水越座長：ちょっと捕らぬたぬきかもしれませんが、例えば中川先生が絵画を教えられて、初め全然初心者なんだけど、やってみたら面白いと。で、じゃあ展覧会行ってみようかっていうことになって、展覧会行ったら、「ああ、こんなのもあるのか」と思って、もういっぺん描いてっていうことをやっていくうちに、だんだん自分も上手くなってきて、ひょっとしたら、ちょっと人に教えられるぐらいになるかもしれず。そういう感じで３年、５年、10 年と、かかってだんだん人が育ってく、そしてまた新しい人が来るっていう。理想論かもしれませんけど、そういうことができるといいなっていうふうに思います。

○柳澤委員：そうですね。理想的にはそういうことですね。

○水越座長：もちろん、落語や文楽をみんなが参加できるかっていうと、それはもうそんなことはないんですけど、それでもやっぱり文楽の人形に触れたりとかですね、

○柳澤委員：そうですね、かなり鑑賞、近いですね。

○水越座長：高座の上にこう、座布団の上に座ってみるとどんな感じかっていうのを味わうと、随分と鑑賞の仕方も変わってくると思うので。誰もがプロには絶対なれないんですけど。

○中川委員：私事ですけど、大昔ですけど、私が最初に絵描きになったのは、絵描きになる予定ではなかったんですけど、初めて行ったとこが文京区の、昔は成人学校っていう絵画教室が。そこで初心者募集というのが。それで、やっぱり専門にやりたいと思って、そこから入ってったものですから、素人、

○水越座長：失礼ですけど、いくつぐらいの時、初めて、

○中川委員：二十歳ぐらいです。違うほうに進もうと思ってたんです。でも、たまたまこの絵画教室、当時の都電にあった広告を見て、それで初心者募集っていうのを見て、それで初めてデッサンからやって、それが３カ月だったの。だから、今はそういう講習みたいのはないなっていう。

○水越座長：典型的な事例が。

○柳澤委員：理想的な話ですね。

○中川委員：でも今でも中高年になって、ちょっと暇になる人、私のほうの研究所とか、あるんですね、絵画教室が。そうすると、そういう人が多いですね、初めて描く人。そこから、だからだんだん展覧会に出してみようとか、そう思って続けるっていう人、すごく多いんです、絵の場合だと。

○水越座長：だれでもはじめは初心者なんですよね。

○中川委員：そうですよね。

○柳澤委員：この統計の中でも、参加も鑑賞もしてないと。見ると年齢が若くて、仕事が忙しいからと。そういう人こそ、１つ何か持たなきゃいけないんですよね、本当は。朝から晩まで仕事ばかりで忙しいと。そういう人は何か１つ持たせないと。仕事にもプラスになるんですよね、そのほうが。

○水越座長：絶対そうですよね。長いこと続けられますしね。

○柳澤委員：そうですね。

○中川委員：その時に出会った先生が、私の恩師なんですけど、魅力的な先生だったんですね、奈良岡正夫っていう。それで、そのまま文京区の講師でいらしてたのが初対面で、だからそのまま弟子になって、そのまま…。
○水越座長：じゃあちょっと我々は、意を強くしてこれから主張せんといかんですね。

○柳澤委員：そういうような仕組みをつくるということですね。仕組みとしてね。

○中川委員：だから普通の初心者用の講義かなんかで、どの分野でもいいと思うんですけれど。

○柳澤委員：はじめはね。

○中川委員：私はたまたま絵だったんですけど。

○柳澤委員：今はしかし、それをやってないでしょうね。なかなかそれ、大変だから。

○水越座長：僕はパッと見て、１・２・４は比較的こんな感じでいいのかなと思うんです。３だけ今、話を集中してますが、少し３を整理をしたいと思うんですけど。今の中川先生のお話で、ちょっと意を強くしたんですけど、（２）の部分というのは、まさにそういう、いい意味での循環が起こって、区の中でそういうものを主体的にするようにしたいということで。で、さっき林さんがおっしゃった、どちらかというと僕らとしては、ここでいうところの「人づくりの推進」を一番筆頭に持ってきて、ちゃんとそれで人が育ったら、今でいうところの３の（１）ですね、「活動する人・団体を支援する」というのは（２）番目にきて、さらにそういう人たちから、さっき僕は伝道者と言いましたけど、その人たちを発掘して活用するというのを。そういう順番にしてはどうかと思いますが、いかがでしょうか。

あと、ちょっと持論にこだわるようですけど、初心者を広げるのと、継続してもらうのというのは、このけたでやるか、あるいは具体的な例の中に入れるかは別にして、１つ区分しておいたほうがいいのかなというふうに思いますね。すそ野の拡大と継続発展というのを併記するか、あるいは別項目に立てるかしたほうがいいような気がします。

○柳澤委員：そうですね。

○水越座長：４項目あってもいいような感じが。

○柳澤委員：継続は大事ですよね。

○内野委員：そうですね、４つあったほうがいいかもしれませんね。

○柳澤委員：財団法人文京アカデミーも生涯学習講座でいろんなことをやってるんですけど、これに対して系統的な講座の組み立てにはなってないんですよね。たまたまやったりしてるんですよね。

○水越座長：あちこちこうなって、結局分布としてそうなってるわけですよね。

○柳澤委員：ええ。系統的に目的てきにずっとこう…それだけやってるわけいきませんからね、向こうもね。

○水越座長：楢崎先生、とりあえずこの長いの。で、これの右側のほうに吹き出しのようになってるのは、これまで２回、我々が付箋や何かで出したものですね。ああいうものがここに並べていただいてて、左側のほうの項目のほうが抽象的なんですね。こういう３段の表みたいなのをまとめていくということを今やろうとしてまして。これの次のページや何かに、前のふせんの写真やなんかをつけていただいてますけども、この中身の文言の話をしておりました。
ここをどうしましょうね。非常に細かい文言まで、今ここで決めちゃったほうがいいですか。

○八木委員：後でもいいと思います。

○水越座長：ある程度こんな感じだっていうことでよければと思いますけど。要は、まさにここに今書いていただいていたように、ああいう順番でもって、初心者の人がいて、レベルアップして、やがて地域で自分たちでも還元できるようになってという、ああいうサイクルがですね、こんなふうに上がっていくといいなっていうことですよね。ですから、そういうことが引き起こせるように。で、これ、初心者がいなくなると、結局やってる人だけの集まりになっちゃうし、教える人がいないと初心者だけの集まりになっちゃうわけで、両方なくちゃいけないということで、初心者の人たち、つまりさっき林さんが言ったように、楽しむ人を増やしていくということと、それから、そういう人たちが継続的に参加したり鑑賞できるような、ある種の仕組みをつくっていくということ。そういう形で、今、（１）（２）（３）の（２）のところを２つに分けて４項目にさせていただくということでよろしいですか。じゃあそれはそういう形にするということで、文言はこちらで整理をいたします。なるべくわかりやすくするようにします。

○水越座長：今、３という、「文の都」の文化と歴史を未来に伝える仕組みづくりというところの話をしてましたけど、それ以外のところを見ていただけますでしょうか。１個目、「誰もが文化芸術に親しむことのできる機会の充実」というところは、（１）と（２）は、ひと言でいうと（１）は鑑賞なんですね。（２）は、我々が今まで言ってきた言い方でいうと参加なんですわ。モノをつくったり自分で成果を披露し、要するに絵や書でいえば、書や絵を鑑賞するのが（１）のほうで、（２）は自分らがそれをやってみるっていうほうの話です。で、（３）は、もう少し地域に根ざしたものに親しむ機会ということになっています。これは必ずしもホールで鑑賞するようなものだけじゃなくて、伝統芸能で地域のお祭りがあるものとか、そういうものがイメージされてると思いますけど。で、（４）は、（１）（２）（３）の仕組みづくりです。

○八木委員：動きがありますよね。さっきの大きな３番でも、らせんというかサイクルだったんですけど、１番も、鑑賞してるけど、今度はやる側に回りましょうかっていう、そういう表と裏というかですね、そういう関係があるので、なんか動的な感覚がありますよね。

○水越座長：八木さん、１は（１）（２）（３）があって、それで（４）が仕組みづくりとして入ってるじゃないですか。そうすると（１）（２）（３）と（４）でちょっと違ってて、（１）（２）（３）のための仕組みづくりが４ですよね。そうするとですね、（４）をなくしちゃうか、逆に、例えば（３）なんかでも、これに相当する仕組みづくりっていうのがあってもいいですよね。

○八木委員：共通しますよね。

○水越座長：でも、上で仕組みづくりっていうところは要らないのか。この（４）は要らないのかな…。

○内野委員：（４）は、その前の段階のと同じですよね。

○水越座長：うん。なんか論理学みたいな話になってきたな。

○柳澤委員：（１）（２）（３）はハードの面なんですよね。（４）はソフトになるから、

○水越座長：そうか、入れといたほうがいいのか、確かにな。

○柳澤委員：いや、だから要らなくて、これはもう場所とかそういう。（４）はむしろ（３）のとこでやるのかしらね。

○水越座長：でも、柳澤さんがおっしゃったように、機会の充実ということでいえばソフトもないと駄目だから、やっぱりあってもいいのかもしれないですね。絶妙にあってもいいのかもしれない。

○八木委員：（４）は（１）と（２）になるんですかね。鑑賞と参加ということになると。まあ、親しむだから（３）もあってもいいんですかね。

○内野委員：そうですね、機会ですからね。機会というのはソフトになりますね。

○水越座長：微妙に補い合ってあるっていう感じですね。

○柳澤委員：場所を提供しただけじゃ来ないかもしらんからね。

○八木委員：あえていえば、（１）でも、鑑賞の機会と場所の提供をしたら、それがどうしたら、機会をつくった所に来てくれるようになるかってことも考えてないといけない。トータルには、論理的には（４）を（１）でも考えてないといけないということもいえるかなと。（２）も同様だと思うんです。

○水越座長：僕は（３）もかかると思いますね。これは（１）（２）（３）全部にかかる話として（４）があるということでいいのか。

○柳澤委員：根本的なやつですね。

○八木委員：吹き出しのほうでは、いわゆるアンケート結果として、参加が弱い人たちをどうやってここに入れようかということも議論であったってことだったんですね。でもそれはまた、こうやって独立させなくても、あるいはいいのかもしれないですね。それを踏まえた上で、実際の事業例は組み立てていくというスタンスもあるかもしれないです。

○水越座長：いや、自分で言っといてなんですけど、これは入れといたほうがいいですね。これ、ちょっと不ぞろいなんですけど、やっぱり初心者の人になるべく来てもらおうということを、ある程度比重を置いて言うということでいうと、１の（４）を、重なるとこはありますけど、入れといたほうがわかりや…。「提供・充実」っていう３項目だけでいいかと僕は思いましたけど、確かにこれだけだと、柳澤さんがおっしゃるように「なんかハードだけちゃんとやりゃあいいんじゃないの？」っていうことを僕らが言ってるような感じがするので、重なりますけど、（４）に相当するものは入れておいたほうが。

○八木委員：座長がおっしゃった「初心者も」というふうに書き換えたり。初心者じゃない方はここに来ているので。

○水越座長：それは非常にわかりやすい言い方なんだけど、初心者って、

○八木委員：初心者という定義がわからない…

○水越座長：陶芸とか絵画とか書道の初心者っていうのはあるんですけど、ミュージカルを見るのに「初心者だ」とかって言わないかなというのがあって。初心者のがわかりやすいと思うんですよ。で、すそ野を広げるっていうのもその言い方なんですけど、「誰もが」でいいんじゃないですかね。これ、よく考えられてる。だから鑑賞と参加は併記したほうがいいと思うんです、さっきから言ってることでいうと。

長尾先生。今、過去２回、模造紙に付箋でペタペタはったものをですね、事務局のほうである程度整理をしていただいて。かなり話してきたことが、こういう講座があればいいねみたいな具体的なことからが多かったと思うんですけど、もうちょっと大きな方針の柱に具体的な話をぶら下げて、ある図表化をしてる。それを分科会として提示していくっていうことになる、その図表の原案を出していただいてるので。おおむね、最初から参加している人間のあいだでは、だいたいこんな感じだろうけど、個別の項目がこんなんでいいのかっていうことをですね、今、細かい文言のチェックをしているような状態でした。

○長尾委員：はい。どうぞお進めください。

○水越座長：さしあたり１番はそれでよろしいでしょうか。誰もが文化芸術に親しむことのできる機会の充実というところで４項目がぶら下がっていると。これはこれでいいと考えて…ちょっと待って、さっきの林さんが言ってくれたことでいうと、「誰もが鑑賞・参加しやすい仕組みづくり」というのは、林さん、これは一番最初に来たほうがいいのかな。

○事務局：そうかもしれないですね。

○水越座長：それで、施設の充実とかなんとかというのが。そうすると、そのほうがいいんじゃないの？　どうでしょうか。

○長尾委員：そうですね。

○柳澤委員：私は、発想としては、（１）（２）（３）をやって（４）を。

○水越座長：後で総括したほうがいいか。そのほうがいいかな。

○柳澤委員：うまい具合にまとまったら上に持ってってもいいんですけど。

○水越座長：まあいいか。このままにしよう。一応、口で言いますと、「１　誰もが文化芸術に親しむことのできる機会の充実」っていうものの下位システムというか、下にぶら下がる４項目として、「（１）鑑賞の機会と場所の提供・充実」「（２）参加・想像・成果披露の機会と場所の提供・充実」「（３）地域の伝統や歴史に親しむ機会と場所の提供・充実」「（４）誰もが鑑賞・参加しや

すい仕組みづくり」。これでいきます。こういうふうにとりあえずしましょう。

○水越座長：それで２番の一番大きい項目ですね。これが「情報提供、相談体制の整備・充実」というところで、それにぶら下がる項目が「（１）文化芸術関連情報収集・整理」「（２）分かりやすい情報提供」「（３）相談体制整備・充実」。

これはいきなり漢字がつながるので、「相談体制の整備・充実」とか「文化芸術関連情報の収集・整理」でいいんじゃないですか。要するに（１）は、いろんなところでやられてる情報をちゃんと収集して整理して、アーカイブにしたり、何かにしましょうということですよね。で、（２）番の「分かりやすい情報提供」というのは、それを基にちゃんと提供しようと。で、（３）番は、それとちょっと別に、「こんなのどこでやってますかね？」っていうようなことの相談等々を、あるいは「こういうことをやりたいんだけど、どうすればいいでしょうか」っていう相談体制を整備したり充実しようということですね。

○八木委員：そうです。２番の（２）（３）というのは、生涯学習分野でもスポーツでも同じなんですけども、どこで何をやってるかがわかりにくいということが欠点としてあるんではないかなと思います。文京区役所でやってるものは、ともかくとしても、地域全体に広めるとなかなかわかりにくいですね。大学は今 18 あるわけですけれども、各大学でもいろいろ催し物をやっていらっしゃる。芸術分野では音楽大学もありますし、生涯学習分野では大学の各種公開講座があります。そうすると、それを一本化するというのは、ぜひ水越先生にですね、どんな方策で情報の一元化ができるかなというのもお伺いをしたいところでもあるんですけども、ここはそういった意味では共通してる事項だということであります。

○水越座長：これは計画推進体制の強化という５番とは別の意味で、２の情報提供とか相談体制というのは、かなりどこにでも通じる話ですよね。これは言葉を変えれば「スポーツの情報提供、相談体制」だとか「国際○○の…」と同じことですからね。これは理屈としては、集めてちゃんと提供して、相談にも乗るっていうことなので、こういうことかなと思いますけどね。

○柳澤委員：共通してくるからね。

○八木委員：ですから、今、５番だけは外へ出そうとしてますけども、ほかの、今まさにお話があったとおり、もしかしたら分けることは、ちょっと不合理な部分が出てくるかもしれないなという懸念もあります。

○水越座長：そうですね。それは後で全体の分科会ですり合わせればいいし。

○八木委員：２番の（２）と（３）は、ほかと一緒にちょっと整理をさせていただくのがいいのかどうかということをね、共通項として出てくる場合もあるかなと思います。あるいは、この分科会の分野は特別だから、やはり共通項にはなじまないということも、検討してみるとあるかもしれません。その辺のそういう方向性もあるかもしれないということで、ご承知おきをいただければなと思います。

○水越座長：はい。まあ、来る人は、文化芸術でとか、スポーツでって、あんまり考えてるわけじゃなくて、区民として何かやりたいから来るわけなので、この広報系の情報は、あまり区別しないほうがいいですよね。

○柳澤委員：広報系ね。

○水越座長：ちなみにこういう情報をどう整理するかっていう話は、僕はあれじゃないんですけど、僕らの仲間がやってます。もうまじめに整理しないんです。いろんなところで、ある項目とある項目がどのぐらい近しいかってことを計算機に計算させてですね、例えば八木さんっていう名前が出てくる。最近インターネットでありますけど「八木さん」って出てくると、例えば区役所で八木さんと仲のよかったりする人がみんなグーッと顔が出てくるような、そういう仕組みっ

ていうのがあるんですよ。そういうやり方で、もう。全部をきれいに整理しようとすると、すぐ事務化しちゃうので、個別でやっといて、ただ、
○八木委員：１つのキーワードで情報がまたくっついてくるような、そういう整理の仕方がコンピューターを使うとできるらしいということですね。

○水越座長：できるらしいんですよ。そういうことをやったりしてるんですけど、またそれは別の話で、いつかお見せします。

○柳澤委員：具体的な先生の名前を出すと、いろんな検索が出てくるのありますわね。あれがはやってるんですか。なんだろうと思って見てるんですが。

○水越座長：先生の名前でもそうですけど、例えばですけど文楽ナントカ講座っていうのがあるとするじゃないですか。そうすると、それいつ１回やったとか、例えば柳澤さんが人形を使ったとか、どこのホールでやったとか、その演目に関するいろんな情報を並べておくと、その裏側にですね。要するに、昔、アルバムに子どもの写真をはるときに、「1980 年、湘南の○○にて」とか、裏にボールペンで書いたじゃないですか。ああいうような情報をきちんと書いておくと、その情報がお互いに連関をしながら、似たようなものをヒュッと引っ張ってくるということをやれるんですよね。そういうのがないとちょっと。だからお中元をインターネットで買おうとすると、「あなた、この前、これ買ったでしょ。これ、どうですか？」っていうふうに言ってくるようなシステムがありますけど、あれに似たようなものになります。大学でそれをやると、勢力地図がはっきり分かれてるようになってるので、赤裸々すぎて見せられないっていうことがあるんですけど。
　いずれにしても、情報をちゃんと提供しようということでいっぱい集めて、それをものすごく細かい項目できれいに並べてても、担当の方がいなくなったり業者が変わると、混乱したりするじゃないですか。そういうようなことは気をつけたほうがいいので、情報提供をすごくきまじめにやり過ぎないっていうのが実は大事だと。

○水越座長：それは別として、そうすると今、１、２、３という大項目が、ある程度話ができましたね。繰り返し言うと、１は「誰もが文化芸術に親しむことのできる機会の充実」。２は「情報提供、相談体制の整備・充実」。３は「『文の京』の文化や歴史を未来に伝える仕組みづくり」、これは人材育成や初心者を広げるみたいな、いくつかのものになったわけですね。
　４番目、「区内の人、組織、場所などの連携・協働」。（１）地域との連携・協働。（２）区内大学や教育機関などとの連携・協働推進。（３）各種文化施設との連携・協働。（４）区内企業・団体との連携・協働。細かいことですけど、４の大項目のところ、区内の人、組織、場所など「との」がいいんじゃないですか。「などとの」ですよね。などと、区の、ですものね。

○八木委員：などと、の、相互の連携なんですかね。

○水越座長：だとしたら「と」を入れないほうがいいんですけど。だとすると、（２）のところが区内大学…など「との」になってますよ。これはこれでいいのか…。でも基本これは、文京区の計画なので、やっぱり「との」じゃないですか？　区内の人、組織、場所など「との」連携・協働、違うか…。

○八木委員：文京区の計画ですけども、その地域の方々が地域だけで完結するようなところも、中にはあっても悪くはないということでもあります。

○水越座長：じゃあ要らないか、これ。ごめんなさい。じゃあ、撤回です。あと（２）の区内大学で、ここだけ「区内」つけなく…ああ、いいのか。でも要らないんじゃないのかな。それいったら、区内各種文化施設みたいなふうに。まあいいや。入れといたほうがわかりやすいですね。

○長尾委員：ただ、ほかの地域の大学と連携をしないかっていう問題だよね。

○水越座長：拒絶するとか。

○長尾委員：例えば今、柳澤さんと一緒に聞いてる江戸城の話なんかは区外なんですよね。江戸東京博物館。あれは墨田区ですから。

○柳澤委員：あれは各種文化施設のほうに入るんですかね。

○長尾委員：大学じゃないけど、区内という絞り方がどうか。

○水越座長：確かに立教大学が協力してくれるときに駄目だとかって、

○八木委員：そういうことはないですよね。ただ、文京区にはこれだけ大学があるので、あえて隣の大学に頼むより、まず自分の所で、区内を優先したほうがいいのではないかなという思いが表れてるのではないかなと。

○水越座長：企業もそうですね。

○長尾委員：なるべくなら区内で間に合うものは、間に合わすべきですよね。

○八木委員：除外をする意味ではないんですけども、文京区の本当の特長は、大学がたくさんあるということなので、入れさせていただいたのではないかと思うんですけど。

○柳澤委員：早稲田や慶應じゃ、ちょっとまずいでしょ。

○長尾委員：でも、それは大学のほうの思いで。区内の大学の思いはそうかもしれないけれども。

○水越座長：細かいまた文言なんですけど、（２）のところだけが「推進」がついてますけど、これ、要らないんじゃないですか。区内大学や教育機関などとの連携…

○事務局：そうですね。

○水越座長：それから、（２）のほうには「など」が入ってるんだけど、（４）のほうには「など」が入ってないですね。別にいいのか…。団体っていったら非常に広いから「など」は要らないのかな。だとしたら、この「など」は要らないんじゃないの。

○長尾委員：何を意味するかですよね。

○水越座長：区内大学や教育機関「との」。

○八木委員：民間の教育を提供する会社。講座を提供している○○文化センターというようなところだと、それも教育機関といえば教育機関ですけれど、学校教育という形からは少しはずれるということもあるので入れてるのかなと推察しております。

○水越座長：じゃあ「など」はここだけ入れる。あと、大項目で「区内の人」って言ってるんだったら、（１）のところは地域との連携・協働って、「地域」っていう、ちょっと場所みたいなイメージになってるんですけど。区内の…場所などとの連携・協働って、ちょっと変ですよね、「場所」っていうのは。

○八木委員：そうですね、場所と連携っていうのは…。

○水越座長：これはむしろ地域なんじゃないのかな…。

○八木委員：場所というか、施設とかいう意味なんでしょうか。

○水越座長：施設ね…。

○長尾委員：場所、なんかちょっと違和感ありますね。

○水越座長：場所ってなんかあれですね。

○柳澤委員：卑近なあれだね。

○水越座長：西片との連携・協働、

○柳澤委員：地域を含めてるのかな。地域があるからかな。

○水越座長：これは施設もあるし、地域もあるんじゃないかなと。区の中のさらに地域っていう意味ですよね。地域っていう言葉を後で使うんだったら、ここは「施設」にしますか、「場所」という言葉を。で、「など」って入ってるわけだから、それ以外の意味も入るということで。自治会っていうのは、どれになるんですか。組織？　自治会は組織ですね、町内会とか。

○八木委員：そうですね。

○柳澤委員：大学やなんかは何に入るんですか。

○水越座長：大学は組織ですよね。

○柳澤委員：組織？　機関だね。

○八木委員：基本構想の中では、そういう主体を、区民、地域活動団体、非営利活動団体、事業者、それから区というような、一番細かく分けると、そういう言い方で分けています。ですから大学も事業者なんだという見方で分けてたりはしていましたね。

○水越座長：もういっぺん言ってもらえますか。

○八木委員：区民、それから地域活動団体、非営利活動団体、事業者、それから区なんですね。で、区民って何かっていうと、区内に住む人、働く人、学ぶ人ということで、在住、在勤、在学を区民としてますよというような定義づけでしていますね。

○水越座長：そしたら、今の言い方でいうと、「区内の人、団体、事業者などとの連携・協働」にしたらいいんじゃないかと。

○八木委員：そうですね。そうすると（4）とも合いますね。企業というのを入れてますので、事業者ですから。

○水越座長：そうしましょう。一番上のところでそうなってるんだったら、区内の組織、場所などの連携・協働というのを、区内の人、団体、事業者…ですか？

○八木委員：そうですね、団体、事業者。

○水越座長：事業者ですね。「…事業者などの連携・協働」と。これは僕らが考える上位のところでそうなってるんだったら、それでいいですね。

○八木委員：先ほど「区内大学」というのは、基本構想のほうでは「大学」だけで済ませてるよ

うな。芸術分野ではたまたま使ってない用語ではあるんですけども、あえて「区内」とまでは言ってませんので、ちょっとよく調べて整合をとらせていただくということでよろしいでしょうか。

○水越座長：それは企業のほうも同じですね。区内という字を入れるかどうかは検討してみてください。

○八木委員：はい。

○水越座長：これ、でも…これでいいのか。なんとなくここは、わかりやすいような芸がないような感じですね。大項目で連携・協働するよっていって、地域、大学、教育機関、文化施設…。まあ、それでいいんだね。それで連携・協働を全部しますっていうことですね。

○柳澤委員：問題は、文化事業で何をやるかですよね。何を連携するかですね。

○八木委員：それはちょっとまたお伺いして。

○水越座長：ここは、だからこの前から僕らが付箋で貼り付けて、根津神社がどうだとか、企業で何ができるかとか、あるいはサッカーミュージアムもあったみたいな、そういうことだと思うんですよ。そういうのでいいものを、この一番の右側のほうに出していけばいいんじゃないでしょうかね。

この前、僕、八木さんに申し上げたかもしれませんけど、東京大学が、いろんな研究室とか学部で地域連携をして教材をつくったり出前授業をやったりしてるやつを全部まとめるナントカカントカっていうのに入ってるんですよ。名前忘れちゃったんですけど。

○八木委員：長い名前だとかっておっしゃっていました。

○水越座長：そうそう。大学発教育支援コンソーシアムっていうんですけれども。ようやくすべての東大の先生たちに、アンタんところでもしどこか、別に文京区に限らなくてもいいんですけど、長野県松本市でもいいし、どこでもいいんですけど、そういうところで地域のために何かやってることがあったら、どういうことをやってて、それがほかでもやってもいいのか。あるいは、もし教材みたいのをつくってたら、それをちゃんと出してくれっていうのを、全部、今、集めてるんです。むちゃくちゃな数なわけです。北海道演習林とかでスギの花を見ようとか、花粉症のもとをつきとめようとかっていうのから始まって。でもバラバラで。それをようやく集めて、パッケージ化して、連絡先はこうだよっていうことが言えるようになってるんですけど、東大だけでやってもしょうがないじゃないですか。だからお茶の水とか早稲田とか、あと旧七大学といわれている大学に、「あなたのところもやりませんか」って東大から呼びかけて、だいたいみんなまだやってないんです。お茶の水はきちんとやってるんです。お茶の水は非常にきちんとやってるんですけど、東大は全く今まであれだし、筑波と広島大学、要するに高等師範ですけども、これは地域連携をしっかりやってて、広島もいろいろやったり。非常に面白い、海のカキのなんとかでこうだとかっていうのから始まってやってるんですけども。要するにここでいう、区内の大学との連携というときに、潜在的にはものすごい数があって、そんなもの、そのまま来られたら大変なことになるっていう。

○八木委員：そうですね。ただ逆に、それだけのものがあるのに、こちらも知らない状態でやるのは、あまりにもったいないなあと思います。

○水越座長：ようやく、だから大学でそういうことを今の体制でやれる。きのうは小石川高校の校長さんが僕のところに来て。来た理由は、僕の師匠が小石川高校を出てるんですよ。それで、あの人に会いに行きなさいっていって来られたらしいんですけども、やっぱり大学と連携をしたいし、地域と連携をしたいって言いまして、僕は東京大学のその話と、今日のこの話をしておきました。小石川高校の子たちに、ちゃんとシニアと一緒に連携をするといいんじゃないのみたいな。

○八木委員：そうですね。そうすると教育機関であるからできるということですね。

○水越座長：その校長先生は女性のバリバリの先生でしたけども、小石川復活を願ってるわけですよね。「やりますから」って。いろんなところで話は挙がってるんですけど、やっぱり情報が俯瞰できないんですよね。

○水越座長：そうすると、すいません余談でしたけど、１から４のことは、ほぼ今考えて、３についてだけ、いくつか項目を、ちょっときれいに言葉を直す必要があるかと思いますが、まずおおむねこういう形でよろしいですかね。

○八木委員：基本構想のほうの 25 ページのところで、

○水越座長：これと要するに矛盾してちゃいかんわけですね。

○八木委員：そうですね。基本構想ということで、文化芸術振興は、10 年後には、この太枠の中のようにやっていきましょうと。そのためには、具体的には（２）に書いてあるようなことを取り組んでいきましょうということを決めさせていただいたわけでありますけども。③の区内で「新たな文化の創造」というのが一番気になるところがございます。それと①のほうの、文京区のイメージを広く発信ということ。①の３行目ですね、「イメージを広く発信……」、これは文京区のことだということですね。「文人のまち」「江戸の香りの残るまち」ということは文京区ということでありますけれども、「イメージを広く発信できるようなことも取り組んでいきますよね、文化振興部門は」ということで言われたものです。これは、どこでやっていくかというのは、具体的な意見の、事業案の中に入れてももちろん大丈夫ですし、この中に入るかなというのも、なかなかちょっと難しい部分もあるんですけども。

○水越座長：文京区基本構想の中には、文化振興ということで、大項目では「『文の京』の文化や歴史を伝承し、創造する、心豊かで潤いのあるまち」っていう、なんかマンションの広告みたいなあれですけど、こういうふうになってます。「区内に存在する多くの伝統文化や歴史・文化資産と共に生き、後世に伝えることを目指します。また、多くの区民が文化・芸術活動に参加できる機会や発表する場の提供などを行うことにより、文化の創造を支援し、身近に文化にふれることのできる、心に潤いのあるまちを目指します」。おおむねこれは大丈夫だと。

○八木委員：そうですね。

○水越座長：ひとつあるのは「文化の創造を」というところですね。

○八木委員：ええ。それは具体的には③なんだろうなと思うんですけど。

○水越座長：で、その今の大きな理屈のための、実現のための項目が、取り組みが３つあって、１つは、関連団体と協働して、さまざまな文化に関する情報やイメージを発信し、ふれあう機会を提供するということになっていて、この「広く発信し」というのが、八木さんが今、気にされているとこですね。２番目のところは、後世に伝えるために文化遺産の修復・保存・再現に努め、活用するとともに、伝統文化の保護・継承、さらにそれに携わる人々を支援するということで、ここに修復・保全なんかもあります。これはちょっと、違いますね。

○八木委員：ええ。アカデミー推進部でできることではないんですけども。

○水越座長：３つ目は、区の独自の文化や新しい文化が創造されるように、区民が参加・発表できる場とつくっていきましょうという話です。だからおっしゃっていただいたように、新しい文化をつくっていくという話と、広くイメージを発信するというところが、この中に入っててもいいんじゃないのっていうことなんですけど、ずばり言うと、イメージの発信のところは２の（２）「分かりやすい情報提供」をスラッシュでもして、幅広い情報発信というふうにしとけば、ここ

に入ると思います。
　で、新しい文化の創造の話はちょっと難しいですね。これは僕ら、今まで実はあまりやってきてません。個人的には興味があるとこなんですけど、追加資料や何かを見ると、やっぱり伝統的なものを鑑賞したり参加するっていうのが多くて、例えばメディア芸術みたいなものは全然人気がありま…、ちょっとメディア芸術って聞き方があまりいいとは僕は思わないんですけども、と思うので、これをどうするかということですね。例えばですけど、大学との連携みたいな中では、いつの時代も大学の若い人達はすっとんきょうなことをしますので、新しい文化がそこから出てくるみたいなことはあると思いますし、「未来に伝える仕組みづくり」という中の人づくりとか人材の支援みたいなところでも、もっと右側の具体的な項目で入れることもできるかもしれない。ただ、個人的には新しい文化の創造みたいな項目が立ってもいいとは思いますけどね。

○八木委員：項目でなくてもよいわけですけども、これを意識したけれども、なかなか、これは10年後ということの中の基本的な取り組みということの中での、3年間ということで書いてありますので、それに合わせると多少のことも言っていったほうがいいと思います。ただ、新たな文化って、作りますといって作れる性質というよりは、育むというかですね、そういうことの趣旨でどうやってもっていけばいいかなというところが難しい。

○水越座長：すごく理屈で言うと、初心者の人がどんどん増えて、それで継続して面白いと思ってやってくれる人が増えてくと、お師匠さんのような人がだんだん増えて、その人についてまた新しい初心者の人が増えてって、さっき言ったようなのがあるじゃないですか。多分、新しい文化っていうのはそこで突然変異が起こるんですよ。だから全く違うところからボコッと出るんじゃなくて、やっぱり絵画でも、ある流派があって、それをちゃんとわかった人が少し違うものを出すというようなことになるというと、

○柳澤委員：1の（2）のとこに「創造」って入ってます。この創造は違うんだろうけど。10年後はどんな文化が出るんでしょう。10年後に何か文化が出て、これは本当は文京区発信なんだっていったら一番いいわけですな。やっぱりコンピューター関係なんですかね。アニメとか。新しい文化というと。

○水越座長：どうですかね。

○柳澤委員：確かに文京区発信の新しい文化というのがあったら自慢できますよね。

○八木委員：そうですね。

○柳澤委員：そういうことができる素地があったほうがいいんでしょうけど。

○内野委員：そうですね。でも、新たな文化の創造って、やっぱりさっきのこれでいうと3番目の循環で、発展していく中での進化の中で出てくるんだと僕は思うんですね。

○柳澤委員：ここの3番の循環の中で。

○八木委員：これらのことを、いったんちょっと意識をしていただければ大変ありがたいなということで、お話をさせていただきました。

○水越座長：今おっしゃっていただいたとおりでいいと思いますね。活動する人・団体を支援するというのも、ただ今やってる人たちを何か指定してあげたり、何かの助成をするっていうだけじゃなくて、新しいことをやってる人達に場を与えるっていうような意味もあると思うんですよね。そういうようなことを一番右側の項目で入れてくようにしましょうか。

○柳澤委員：そうですね。

○水越座長：あと、僕はですね、前に事務局の方々と話をしてる時に、自分自身が新聞とかテレビとか、そういうメディアのことの研究をしてるものですから、情報提供等々とか、あと社会連携のときに、ケーブルテレビとかですね、あと、そうそう数は多くはないですけどミニコミとか、区報とは別に、何か趣味で、例えば俳句の雑誌をつくってるとかですね、そういうようなのは非常に重要だと思ってるんですよ。朝日新聞とか NHK みたいな大きいものじゃないんだけど、区の中で自主的に一般の人がつくってるようなメディアっていうのは、かなり重要だと思ってて。実は区でどれだけ一生懸命提供してもなかなかあれなんだけど、地域の何かチラシのようなものだとパッと人が来てくれるっていうことはよくある話で、ミニコミの研究というのが結構実はあるんですけど。そういうことは僕は、今回あまり２回のワークショップに出なかったんですけど、一番右側の具体的な項目の中には、そういうものが入ってもいいのかなというふうに思います。

○八木委員：従来にあまりない視点ですので。

○水越座長：実はそういうものと、情報提供等々の整備は、これは区がやることですけど、矛盾しないというか、両方ないと駄目で、いわば慣行的なものだけがあっても草の根的にそういうものがないとやはりうまくいかない。両方あったほうがいいという。

○柳澤委員：趣味の会なんかでも出してますよね、大変なんですけどね。

○水越座長：持続するのが大変。

○水越座長：そしたらですね、とりあえず今一番大きな項目と、それから真ん中の項目に関しては、ほぼ検討ができたと思います。それで、右側の項目が課題になりますね。右側というのはですね、具体的なことですね。例えばこの前、区内の企業の参加とか、企業の社員が参加するとどうなるだろうとかですね、六義園だとかサッカーミュージアムみたいなとこと連携したらどうだとか。こういう話を僕らは付箋で出してきてたわけですね。ああいうのを、今検討した大項目にぶら下がる小項目に、さらにぶら下げる形で、具体例として出してくということをする必要があります。これ、どういうふうにやればいいんですかね。

○八木委員：これをシートのほうに、お考えをお書きいただければと思います。

○事務局：今日、皆さんのお手元に席上配付させていただきました、一番頭のところに、「文京区アカデミー推進計画」文化芸術分野　事業（案）提案シートという、ホチキス止めで３枚ありますが紙がお手元にあるかと思いますけれども、ございますでしょうか。今、先生からおっしゃっていただいた、具体的な事業のところについて、皆さまからお知恵をいただきたいというところで、今回、提案シートを用意させていただきました。

　この提案シートの中に枠を設けておりまして、どういった枠を設けているかといいますと、事業名を書く欄、あとは内容を書く欄がありまして、そこの右上のところに「分野別の目標」「基本的な方向」という枠がありますけども、そこについては今日、皆さんで一緒にお話をさせていただきました、この資料第７号ですね。この番号のどこの柱に結びついてくる事業であるかというところを示していただきたいというつくりになっております。ですので、今、現状あります事業で、例えばふるさと歴史館のほうで史跡めぐりというのがあります。地域の歴史や文化を知るために史跡めぐりという事業をやりましょうという案をいただいたときに、事業名のところに「史跡めぐり」と入れていただいて、これが、１の（３）のとこにある地域の伝統や歴史に親しむ機会かなというところであれば、分野別の目標のところに「１」と書いていただいて、基本的な方向のところに「(３)」と書いていただく。で、内容のところには、具体的に実施主体が誰であるとか、事業の対象者は誰であるとか、また、どこでやるかだとか、そういったところをですね、皆さんからご意見をいただければと思います。例えばこれについては、今、ふるさと歴史館のほうでやってる事業ですけれども、例えばそういった文化施設のところで主催をしてくださいといったご意見であるとか、これは区民を対象にします、または区外の方も対象になるかもしれませんけれども、どういった方々を対象に、文京区内で月に１回やったらいいのではないかとか、今

日は森鴎外コースとか、今日は樋口一葉コースといった具体的な案を、内容のところに書いていただければと思います。
　シートについては３枚つけさせていただいておりまして、枠が８項目ありますけれども、枚数については、まだまだ書き足りないということであれば、適宜、お手数なんですけれども、コピーをしていただいて書いていただくなり、もしくはいつも電子メールなどで意見をお寄せいただいている方は、事務局のほうにもお手伝いいただきまして、メールでデータを後でお送りさせていただきますので、そちらのほうに入力してお送りいただければと思います。
　番号なんですが、今日、柱の３のところについては４本柱にするということになりましたが、それでいきましょうか。今の番号のままでいきましょうか。

○水越座長：とりあえず、４本柱のどれがどれだかよくわからないと思うので、今日のままでいって、あとはこちらにちょっと任せていただくということでいいと思います。よろしいでしょうか。

○事務局：もう一点、番号に入らないものについてもお書きいただくことも可能かと思いますので、これは番号を入れない部分についても、いい案があったらどんどん書いていただきたいと思います。

○八木委員：分類が難しいなと思うものがあれば、分類の番号は結構ですので、ぜひアイデアを書いていただくとありがたいです。

○水越座長：これって、基本的なことですけど、今もうあるものでもいいんですか。

○八木委員：結構です。ただ、既に今あるものばかりお書きいただくと、実は今の計画と全く同じものが出来上がることになってしまいますので、新しいものや何かご自分として楽しめるかなというのを書いていただくと大変ありがたいなと思います。今あるものに少し変えるともっといいよっていうのがあると、それは非常にいい案になると思います。

○水越座長：この項目っていうのは、こっち側にくっつくわけじゃないですか。そのときは、とりあえず、この紙としてはタイトルみたいなものが並ぶような感じになるんですか。

○八木委員：そうですね。ただ、実際の計画書にしたときには、案をすべてそのまま載せるとは限らなくて、また議論をしていただきます。まずはアイデアを出していただければということが今回のお願いということであります。

○柳澤委員：メールでも出せるわけ？

○八木委員：メールでフォーマットをお送りしますので、ご返送ください。

○柳澤委員：そのほうが出しやすいですね。

○水越座長：僕らは、ある意味で、こっちから始めたみたいなところがあって、既に写真である、こういう付箋をはった時に、この時には古典芸能とかですね、文学の講演とか、建築物の活用とか、ちょっと断片的なことにはなってますけど、こんなことがあるといいねとか、こういうことがあるんだねってことは既に話し合ったと思うんですよ。なので、ある程度、前回までのことを思い出していただきながら、ご自分で「こういうのがあるといいんじゃないか」っていう、どちらかっていうと今ないようなものをですね、書いていただければと思います。ただ、僕の理解では、あんまりかっちりしないものでもいいと思うんですね。事業名はさすがに要るかもしれないんですけど、さっき佐藤さんが言ったみたいに、どこに入るかわからなくても、どっちかといえば新しいアイデアがあったほうがいいわけですから。そういう意味では最低限、事業名とか、だいたいこんな内容だ、どうだろうというのがあったらいいんだけど、それ以上の部分は、ある程度ゆるい感じで自由に書いてもらってもいいのかなと、僕は個人的には思うので。そういうのが

ある程度出てくるとイメージがわきやすいと思いますので、負担のない範囲で結構ですので、これは7月 14 日までですね。

○八木委員：はい、申し訳ありません。

○水越座長：繰り返し言うと、１週間のあいだで、前にお考えいただいたものも参考にしつつ出していただけると大変助かります。うまくどこに入るかわからないものについては、ある程度事務局のほうでとりあえず入れていただくということができるかなと思います。

○八木委員：今までやってて、これは大切だからぜひやっぱり続けたほうがいいから書くというのも、それも全然差し支えないですから。

○水越座長：今回、比較的時間をとったのは３の部分だったわけですけど、結局、なるべく初心者の人に来てもらう。それから、鑑賞だけしてる人に実際自分で表現したり創作してもらう。そういうことで継続をしてもらう。そういうようなあたりを少し重点的に評価したらどうだというのが全体の意向だったと思うので。例えば焼き物でも結構ですし、落語でも結構なんですけど、単にそれの講座というよりは、今言ったような趣旨でいうと例えばどうなんだろうというようなことをですね。ちょっと難しいかもしれませんけど、例えば能楽堂の舞台に立って、別に能の声は出せなくても、声を出してみるとどのぐらい響くのかみたいなことを実際にやってみるだけでも、非常に意味が僕はあると思うんですね。何かそういう、僕らが今言ってきたようなことにちょっと即した形で、ひと工夫スパイスを加えていただけると面白いのかなというふうに思います。

○八木委員：文章じゃなくても、個条書きとかでも結構です。

○水越座長：メモ書き程度のものでも結構だと思います。今日は全体に非常に抽象的な話っていうか、大枠な話をしましたけど、今お願いをしたことは、むしろ具体的なほうがいいですね。古典芸能を勧める講座みたいなアイデアよりは、もっと非常に細かい話のほうがいいわけで、あの場所を使おうとかですね。

○八木委員：やるときに、もしかしたらこんなことは、本当は少し大変だなとかですね、やると楽しいけど多分ここがネックになるんじゃないかなあなんてことがもしあれば、また。

○水越座長：そうですね。

○八木委員：ここさえ解決すれば、このアイデアはとてもよくなると思いますよっていうことがあると、皆さんもわかりやすいと思います。

○水越座長：ということです。それではすみません、宿題が出ますけど、なるべく負担のない範囲で気軽に考えていただいて、お寄せいただければというふうに思います。それでは次回の案内というのをお願いできますでしょうか。

○事務局：宿題が出た後で、もう１つお願いがありまして、毎回のことではございますけども、意見シートも同じ日で、7月 14 日（水）までに、お気づきの点やご意見などございましたらお寄せください。参考にさせていただきます。
　次回、第４回分科会ですけれども、前回お配りをさせていただいてます今後のスケジュールのとおり８月４日（水）午後６時 30 分から、21 階の 2101 会議室で行います。よろしくお願いします。

○水越座長：８月の会で分科会として最後になりますので、皆さんからお寄せいただいたものが、一応、一覧になっていて、

○八木委員：はい。で、それを１週間ぐらい前にお返しするんですよね。

○事務局：はい、メールでまたお送りいたします。

○八木委員：実は、これだけたくさん中項目がありましたけども、アイデアが１つもない項目がもしあると、実現できないことになってしまいます。さっきの横の大きな表でいきますと、こういうふうに真ん中にいっぱいありますけども、どなたも、例えば１の（４）についてはご意見がなかったということも実は想定され得るものですから、それは困ってしまうもので、１週間ほど前に、皆さんのご意見を一度送らせていただきます。それで、またそのさらに１週間のあいだで変更していただいてもいいですし、これが抜けてたからちょっと考えようということでも結構です。で、行政のほうも、もし抜けがあった段階から、こちらもこういうのはぜひ提案させていただいたほうがいいのではないかということも、その時に申し上げさせていただきたいと思ってますので、ご了承いただければと思います。

○水越座長：最後の最後の抜けは、私がちょっと、力技で奇想天外なことを考えようと思いますけど。

○八木委員：ありがとうございます。

○水越座長：ということでございますので、次回お会いする時に、この分科会としてのいわば最後の会となりますので、どうかよろしくお願いいたします。それでは今日はこれで終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。